

埼玉学園大学・川口短期大学 機関リポジトリ

定性効果と派生目的語制約

著者	現影 秀昭
雑誌名	埼玉学園大学紀要．人間学部篇
巻	8
ページ	13-27
発行年	2008-12-01
URL	http://id.nii.ac.jp/1354/00000776/



定性効果と派生目的語制約

The Definiteness Effect and the Derived Object Constraint

現 影 秀 昭

GEN'EY, Hideaki

This article shows that English 'accusative with infinitive' construction subject to the Derived Object Constraint (DOC) of Postal (1974) cannot be fully accounted for by either Bošković's (1997) and Lasnik's (2008) case-theoretic analyses. The main empirical goal of the article is to argue that the relevant construction is in part conditioned by the effect of definiteness involved with the 'raised' NP and the semantics of the main clause predicate (i.e. *allege*-type verbs), within Chomsky's (2008) Minimalist Framework.

1. 序

本論考は、*allege*類動詞の特殊性と連動して、①その不定詞付き対格においては（下のフェーズの）Tが、Cからの継承以外の手段でEFを得たので弱く、埋め込まれた *vP* / *vP**のSPECにある非代名詞DPを、補文TPのSPEC-Tに内的併合で繰り上げることができず、虚辞の外部併合でEFを満たさない限り排除され、②補文のSPEC-Tに繰り上がっても、そこにとどまることができず主節のTあるいはCのEFによって牽引されなくてはならず、③弱い代名詞は（強い代名詞と接辞の間で）接辞編入に似た操作を適用される、ということを経典統語論（NS）で措定する（cf. Chomsky (2008)）。次にChomsky (2008) のわく組みに基づく上記の分析を補完するものとして、*allege*類動詞の不定詞付き対格構文において不定詞の意味上の主語だったものを、

主節の目的語に繰上げる統語的な手段が、DPの「定性」によっても左右されることになるということを論じる。つまり*allege*類動詞の不定詞付き対格構文（1a）は、*believe*類（ECM：例外的格付与）動詞のそれ（1b）とは異なり、*there*構文（2）と同様に、動詞句内の主語に「定名詞句（e.g. *Melvin, the riot, Harry*）」を取ることができないので、「定性効果」を示すことになる、というものである。アスタリスク（*）は、それが付された構成素が非文法的であることを表わし、（?）は容認度が下がることを表わす印とする（cf. Safir (1982), C. Lyons (1999: 16), Chafe (1976), Comrie (1981: 123ff, 191)）。

- (1) a. *He alleged *Melvin* to be a pimp.
(Postal (1974:304), Postal (1993: 349))
b. cf. He believed *Melvin* to be a pimp.
(Postal (1993: 349))
(2) a. There ensued a/*the riot on Mass.

キーワード：派生目的語制約、繰り上げ、定性効果、不定詞付き対格構文、フェーズ

Key words: Derived Object Constraint, Raising, Definiteness Effect, Accusative plus Infinitive, Phase

Ave. (Reuland and Meulen (1989: 2))

- b. *There's Harry with a red hat on, isn't there? (Lakoff (1987: 466))

なお「定性効果」は通言語的な現象である。(目的語が定名詞句のときだけ否定 (e.g. ekki) の前に出すことができる) アイスランド語の「目的語転移 (object shift)」もその一例である。

- (4)a. *Hann las [bækur] ekki.

he read books not

- b. Jón las [bækurnar] ekki.

John read the books not

(Ritter and Rosen (2005: 21-39))

このことは、allege類動詞の不定詞付き対格に見られる「定性効果」が、その場限りの指定ではなく、普遍的な傾向をもっていることの証左のひとつとなつてと思われる。

本論考の構成は以下の通りである。第2節で先行研究としてPostal (1974, 1993)、Bošković (1997)、Lasnik (2008) を概観し、その問題点を指摘し、第3節でChomsky (2008) に基づく分析とその補完を提示する。第4節では結論と残された問題について述べる。

2. 先行研究

2.1. Postal (1974, 1993)

Postal (1974) は、伝統文法で「不定詞付き対格」呼ばれる構文(5b)の派生には「(補文の主語から主節の) 目的語への繰り上げ」が適用されるという立場を擁護している。

- (5)a. *They believed (that) each other were honest.

- b. They believed each other to be honest.

(Postal (1974: 42))

相互 (関係を表わす) 代名詞each otherは、(5a) の様に節境界を越えて先行詞 (e.g.

They) と関係付けることはできない。一方(5b)では不定詞補文の主語が主節動詞の目的語位置に「繰り上げ」られて、先行詞と同一節仲間となったと仮定すれば、その適格性をうまく説明することができるというのである(Postal (1974: 42))。

Postal (1974: 304ff.) およびPostal (1993: 349-350) は、(6)の様なECM動詞のパラダイムと比較して、欠陥があるとされる(7)の様な動詞のパラダイムが、「派生目的語制約 (DOC)」に関係すると論じている。

- (6)a. He believed Melvin to be a pimp.

- b. Melvin was believed to be a pimp.

- c. Melvin, he believed to be a pimp.

- d. Who did they believed to be a pimp?

- e. the Parisian who they believed to be a pimp. (Postal (1993: 349-350))

- (7)a. *He alleged Melvin to be a pimp.

- b. Melvin was alleged to be a pimp.

- c. Melvin, he alleged to be a pimp.

- d. Who did they allege to be a pimp?

- e. the Parisian who they alleged to be a pimp. (Postal (1993: 349))

「派生目的語制約 (DOC)」とは、allegeを代表とする一部の動詞類が、不定詞補文の主語位置から主節の目的語位置に名詞句を繰り上げて、その名詞句をそこに留めたまましておくような派生を排除する制約である(Postal (1974: 305))。また、Postal (1974: 305) は、DOCに従う動詞類のリストも併せて提示している。

- (8) acknowledge, admit, affirm, allege, assume, certify, concede, decree, deduce, demonstrate, determine, discern, disclose, discover, establish, feel, gather, grant, guarantee, guess, intuit, know, note, posit,

reveal, state, surmise, think, understand,
verify (Postal (1974: 305))

Postal (1993) はさらに assure, show の様な動詞も DOC に従うと論じている。

(9)a. John, who I assure you to be best ...

b. *I assure you John to be the best ...

(Postal (1993: 347))

ただし、Postal (1974, 1990) の DOC に従う動詞のリストに問題がないわけではない。Gen'ey (2003) では、上記のリストに含まれる動詞でも、announce, admit, reveal, acknowledge, discover, feel など、DOC に従わない動詞の実例があることを指摘しておいた。

(10)a. I should not be surprised if you
discovered the murderer and poisoner
to be one of the Hatter family ...

[Ellery Queen. 1932. *The Tragedy of Y*]

b. the book reveals the author to be a
more superstitious and inept thinker
than ...

[Bridges Coll. Essays 135; quoted in
Jespersen (1940: 283)]

Postal (1993: 359-361) は、関係文法の枠組みで、概略、主節動詞が DOC に従う動詞類の場合、(不定詞補文の主語から主節の) 目的語 (位置) に繰り上げられた「虚辞でない名詞句」は削除され、代わりに当該の名詞句が受動化 (7b)、話題化 (7c)、複合名詞移動 (11a)、右節点上昇 (12b)、の「ターゲット」となり (主節の目的語以) 外の位置に現れれば適格であるという「指定」を行っている。

(11)a. They alleged to be pimps - [all of the
Parisians who the CIA had hired in
Nice].

b. They might have alleged to be pimps,
and probably did allege to be pimps -

[all of the Parisians who the CIA had
hired in Nice]. (Postal (1993: 352))

しかし、Postal (1993: 359) が「MGG バージョン」と呼ぶ DOC の定式化は、統語論上の「指定」に過ぎず、なぜ「虚辞でない主語 - 目的語繰り上げの名詞句」が削除されなくてはならないかということについて原理的な説明を与えていない点に問題がある。一方、繰り上げられた名詞句が「虚辞」である場合には容認されると Postal (1993: 361) は指摘している。ただし (12c) の様に、間接目的語と不定詞補文の組み合わせは (別の一般的な制約で) 排除されることも Postal (1990: 361-362) は併せて指摘している。

(12)a. He alleged there to be stolen doc-
uments in the drawer.

b. He conceded it to be snowing in
Patagonia.

c. cf. *I assured him there to be stolen
documents in the drawer.

(Postal (1993: 361))

さらに DOC に従う動詞の不定詞付き対格構文は、制御動詞や寄生空所や tough 構文と両立しない (Postal (1993: 363))。以下 PG は寄生空所、t は移動の痕跡、下付きのアルファベット (x, z) は、同じ下付きアルファベットを付された要素との同一指示を表わすものとする。

(13)a. *Bill didn't want/expect to be alleged/
proved to molest teenagers.

b. *Who did they fire t_x after alleging/
proving PG_x to molest teenagers?

c. *Chris was hard to allege/prove to
have molested teenagers.

(Postal (1993: 363))

believe 類動詞の不定詞付き対格構文も、寄

生空所やtough構文とは両立しないが、allege類動詞に対する制限の方がきついとPostal (1993: 358) は指摘する。

(14) ?? the horse that you bet on t_x because
you expected PGx to win the race
(Postal (1993: 358))

ただしPostal (ibid.) は、なぜallege類動詞の不定詞付き対格のtough構文や寄生空所の方が、believe類動詞の対応する構文に比べてより制限がきついのか、事実の指摘のみで、その理由については何も説明していない点が問題となる。

以上がPostal (1974, 1993) のDOCに従う動詞類の分析の概要と、その問題点の指摘である。なおMair (1990: 177 ff.) もPostal (1974) のDOCの問題点を指摘している：①DOCは「その場しのぎ (ad hoc)」であり、なぜallegeはDOCに従い、believeやpronounceは従わないのかに対する説明が与えられていない、②DOCははっきりと境界線を引くことのできない領域に、明確な文法的区別を行おうとしている（例えば、allegeと異なりsayは関係節ではなぜ非文になるのかについて説明できない）、等々である。

2.2. Bošković (1997)

Bošković (1997: 58) は、虚辞there / itはallege類動詞の不定詞補文の主語位置で例外的に格を付与されるとPostal (1974, 1993) が述べていることに言及している。またBošković (ibid.) はHoward Lasnik (私信) が指示代名詞も（基本的にallege類動詞と同じ）wager類動詞によって例外的に格付与されると観察していることに触れている。

(15)a. John wagered there to have been a
stranger in that haunted house

(Ura (1993))

b. cf. *John wagered a stranger to have
been in that haunted house

(Bošković (1997: 58))

c. *John wagered the students to know
French. (Bošković (1997: 59))

Bošković (1997: 59) によれば、there, it, himは、基本的には接辞として扱われ、主節動詞に編入されることで格フィルター満たす（ので、格標示されるためにAgr_Pの指定部へ移動する必要がない）という。一方、Bošković (1997: 59) はthe studentの様なより複雑で紛れもないXP要素は動詞に編入することで格フィルターの違反を回避する選択肢が使えずwagerを主節動詞とする不定詞付き対格構文は排除されるのだ、という。Kayne (1994) によれば仏語で接辞は等位接続することができないが、英語の（強勢を与えられない弱い）代名詞も（allege類動詞の不定詞付き対格構文では）等位接続することができないという言語事実がある(Bošković (1997: 59))。英語の代名詞を接辞として扱えば、仏語との並行性も捉えることができる、とBošković (ibid.) は示唆している。

(16)a. *Je le et la recontre tous les jours

I him and her meet all the days

'I meet him and her every day'

b. *Mary alleged him and her to have
kissed Jane

c. *Mary never alleged him and her to be
crazy (Bošković (1997: 59))

しかしBošković (1997) の統語的アプローチには以下の問題点がある。第一に、Lasnik (2008:34) が挙げているallege類動詞の不定詞付き対格構文の例は、補文主語が代名詞であっても容認度が低く、完全に文法的ではな

いことを示していることが説明できない。

(17) a. ?I alleged him to be a fool.

(Lasnik (2008: 37))

b. cf. Je le crois être intelligent

I him believe to be intelligent

もし英語の代名詞が仏語の接辞と同じ扱いを受け、動詞に編入されて格フィルターを満たすのなら、(17a)の様に容認度が下がることはありえないはずである。また、それにもかかわらず、Lasnik (2008: 37-38 n. 12) も「編入」を支持している点に注意されたい。

第二に、Postal (1993: 349 fn.3, 353 fn.10, 357 fn.15) では、英語のDOCパラダイムと仏語のパラダイムには殆ど並行性がないことを指摘している。

(18) a. *Je crois cet home être intelligent

I belive this man to be intelligent

b. *Jacques a été cru être intelligent

Jacque was believed to be intelligent

(Postal (1993: 357 fn.15))

すなわち、英語のDOCパラダイムは受動化を適用したり、複合名詞句移動 (CXS) や右節点上昇変形 (RNR) を適用すれば文法的になるのだが、仏語の場合は、例えば(18b)の様に受動化を適用しても、CXSやRNRを適用しても非文法的である(Postal (*ibid.*))。

第三に、Bošković(1997)は、代名詞が接辞として動詞に編入される条件を明示していないので、「その場限りしのぎ (ad hoc)」であるという批判を免れ得ない、と思われる。例えば(19)の様なECM動詞の場合、代名詞を等位接続しても完全に適格文である。逆に代名詞が接辞であるとする、(19)は非文として排除される、という誤った予測をしてしまう。

(19) Mary believed him and her to have kissed

Jane.

(Gen'ey (2003: 167))

また当然のことながら (対応する仏語では排除されるが) 英語のmeetの様な動詞の直接目的語は等位接続することが可能である。この場合も代名詞を接辞として扱えば、言語事実に反して(20)の様な文を排除することになってしまう(cf. Authier (1992))。

(20) I meet him and her every day. (cf. (16a))

(cf. Bošković (1997: 59))

さらに同じallege / wager類動詞で、Postal(1974)がDOCに従う動詞としてリストに含めている動詞であるにもかかわらず、補文の主語が固有名詞でも代名詞でも適格である実例がかなりあるので、allege類動詞の不定詞付き対格構文に限り、(対格) 代名詞を接辞として扱う根拠がさらに薄れる、と思われる (Gen'ey (2003: 170-171), cf. Bošković (1997: 51))。

(21) the newspaper announced the immediate danger to be past

[Collingwood R280; quoted in Jespersen (1940: 283)]

またCardinaletti and Stark (1999: 175) を援用すれば、英語の弱い代名詞は強い代名詞と接辞の中間で、接辞編入と似た特殊な操作を適用される、と考えた方がよいと思われる。

2.3. Lasnik (2008)

Lasnik (2008: 26) は、Chomsky(1991) の枠組みで、格付与はすべて指定部 - (機能的) 主要部 (Spec - (functional) head) の統語形に還元されると主張し、believe類動詞 (およびDOCに従うallege類動詞) も、不定詞補文の主語 (ECM主語) が (主要部である) Agr. のSpecへ (目的格をもらうために) 繰り上がるという分析を提案している。

(22) [AGRsP SPEC [AGRs' [AGRs [TP (SPEC) [T'
T [AGRoP [SPEC [AGRo' [AGRo VP [V' [V
AGRsP [NP ...]]]]]]]]]]

(Lasnik (2008: 26))

またPostal(1974)の議論を発展させたLasnik and Saito(1991)が挙げる、この種の繰上げ分析を支持する証拠を、Lasnik (*ibid.*)は引き合いに出している。

(23)a. ?The DA proved [the defendant to be guilty] during each other's trials.

b. *The DA proved [that the defendants were guilty] during each other's trials.

c. ?The DA accused the defendant during each other's trials.

(Lasnik (2008: 26))

すなわち(23a)は照応形each otherの先行詞the defendantが、照応形の解釈を決める段階で(23c)に相当する位置(すなわちprovedの目的語 = Agr_oのSpEC)に繰り上がっているので、照応形が先行詞にc統御され適格文となる。しかし、(23b)は補文が定形節であるのでthe defendantはeach otherをc統御できる位置に移動することができないので排除されるというのである。

Postal (1974) のDOCについて、Lasnik (2008: 34) は、「不定詞補文を従えるallege類動詞は(最近の生成文法の用語を使えば)補文主語がA'痕跡(=t')でなくてはならない」という形で捉えなおしている。

(24)a. *I alleged John to be a fool.

b. ?John, I alleged t' to be a fool.

(Lasnik (2008: 34, slightly modified))

(24a)と(24b)の違いをLasnik(2008: 34)は次の様に説明する：①(believeの様な標準的なECM動詞とは異なり)allege類動詞は、不定詞補文IPの指定部にまではるばる手を伸ば

して(目的格の)格照合をする力が、何らかの理由で、十分とは言えないので(24a)は非文となるが、②(24b)の様に、A'移動の第一段階で、当該の名詞句DPが、格照合を受けるのに十分近いところまで移動すると容認度が上がるというのである。

(25)a. John, I alleged to be a fool.

b. Mary did [~~allege John to be a fool~~] too.

(Lasnik (2008: 34))

さらに(25b)(において取り消し線を引いた不定詞補文内)では、Johnに対して(25a)の様に、話題化(A'移動)が適用されていないにもかかわらず、格フィルターの違反は生じていない(Lasnik (2008: 34-35))。その理由は、PFで省略による修復が行われたからであり、この事実は格フィルターがPF要件であることを示している、とLasnik(2008: 35)は主張する。またLasnik (2008: 37 fn.12) は、allege類動詞は完全な名詞句DPに格を認可しないが、(おそらくは編入により)弱い代名詞には格を認可できるのだらうと付け加えている。

(26) I alleged *John/?him to be a fool.

(Lasnik (2008: 35))

Lasnik (2008) の分析には問題点もある。第一に、話題化(A'移動)ではなく、受動化(A移動)(27)によっても(24a)の構造を救うことができるという事実が挙げられる(N.B. Postal (1974, 1993))。例(27)ではAbrahamの痕跡(コピー)の位置を示す為にtを筆者が付け加えた。

(27) Abraham is alleged t to be a liar and worse
(Genesis 12:13).

(www.answering-christianity)

従って「allege類動詞の不定詞補文の主語はA'痕跡でなくてはならない」というLasnik

(2008: 34) の主張は誤りと言うことになる。allege類動詞の不定詞補文の主語は、「A痕跡」でも許されるからである。第二に、Postal (1990) は、格付与の問題としてDOCを扱うことに対して反論を加えている。第三に、そしてこれが重要な問題なのだが、「なぜallege類動詞の不定詞補文の主語が完全なDPであってはいけないのか（あるいはA' / A痕跡でなくてはならないのか）」という根本的な問いには答えていないように思われる。最後に、allege類動詞の不定詞補文の主語が虚辞there / itの場合は適格になるという事実についての言及がない。

- (28) a. *He alleged (those) stolen documents
to be in the drawer.
b. Those stolen documents, he alleged to
be in the drawer.
c. He alleged there to be stolen documents in the drawer.

(Postal (1990: 361))

Lasnik (2008: 34) によれば、虚辞は格フィルターに従うと明記している。しかし、Lasnik (*ibid.*) は、allege類動詞が、例外的格付与動詞believeと異なり、不定詞補文の中まで手を伸ばして、その主語に格を与えることができるほどの力がないとも述べている。thereが格フィルターに従い、格を与えられなくてはならない要素であるとする、(28c) の様にallege類動詞の不定詞補文主語の位置では格照合されない、接辞として動詞に編入される他ないが、Bošković (1997) と同じ問題を生じる (§ 2.3.を参照)。以上のことから、格理論に基づくLasnik (2008) のallege類動詞の分析を、そのままの形で、受け入れるわけにはいかない、と思われる。なおChomsky (2000: 138-139) はAGRPに基づく

SPEC-HEAD一致理論も既に否定している。

3. Chomsky (2008) の枠組みによる分析とその補完: 定性効果としての派生目的語制約

3.1. allege類動詞の言語資料

このセクションではデジタル・コーパスから収集したallege類動詞の実例を若干挙げておく。(29) [_{DP} D [_{NP} alleged N]]: DP内でNの前位(後位)修飾をする過去分詞ないし形容詞のalleged、(30) allege + DP、(31) 主節動詞として定形節を補部にとる用法、(32) 不定詞を従える受動態の頻度が、不定詞付き対格(33) より高いようである。また法廷や刑事事件、スキャンダルなど(の報道)の様な否定的な文脈で未確定の事実について「(根拠なく／根拠に基づいて) 言い立てる」というallegeの用法が多い。

- (29) a. “May I have the alleged key? ...”
[Domford Yates, *The Brother of Daphne.*]
b. this alleged crime/his alleged killer/
the alleged scandal/the alleged alien
visits
c. cf. the facts alleged in the articles ...
[H.G. Wells, *The First Men in the Moon.*]
d. ... objects alleged to be beautiful ...
[Thorstein Veblen, *The Theory of the Leisure Class.*]
(30) The defense alleged the Goebel anticipation...
[Dyer and Martin, *Edison.*]
(31) a. He alleged that coal he had made
several unsuccessful attempts ...
[Gould and Pyle, *ACM*]
b. It is alleged that the author subsequently
received a letter ...
[The Jargon File, 1996]

- (32) Brann ... is alleged to have been standing
at the corner ...

[*The Complete Works of Brann.*]

- (33) a. Sometimes I scratch myself as a donkey
and this is the people who belong to the
overnment who allege me to have been
a ... (www.justice.gov.za/trc/hrvtrans/
venda/davhula.htm -22k-)

- b. ... to defend himself without council
in a hearing which alleged him to be
of UNSOUND MIND.

(video.google.com/videoplay?docid=
2688589430594078734)

- c. The husband at first contended that
his father-in-law had incited his
daughter against him — just as he
alleged him to have done in the case
of his brother, who was married to
another of his daughters — after he
paid him ...

[Ahron Layish, *Marriage, Divorce,
and Succession in the Duze Family*,
1982.]

3.2. Chomsky (2008) の枠組みに基づく believe/ allege 類動詞の不定詞付き対格の分析

Chomsky (2008: 135) では「言語は、言語
機能 (FL) が満たすべき (言語外の) インター
フェースの要請に対する最適解である」とい
う強い極小主義のテーゼ (SMT) のもとで
の研究プログラム (MP) が示されている。
すなわち、言語は音と意味を結びつける最適
な方法であるが、I-言語によって生成された
表現が使用されたり解釈されるためには、言
語が一方で感覚運動系 (SM)、もう一方で概
念意図体系 (C-I) というインターフェース

の体系によって理解され、活用されるよう
なものでなければならないということである。
また言語の「離散的無限性 (有限個の離散的
要素を用いて、無限の言語表現を作り出すこ
とができること)」を保証する道具立てとし
て、X という既に出来上がっている統語的な
構造 (=SO) と Y という SO を結びつける「併
合 (Merge)」(という必要な回数だけ繰り返
しが可能な操作) を仮定する (これは言うま
でもなく演繹の深さをねらった説明である)。
併合には非対称的な項構造を作り出す外的併
合 (External Merge) と、(解釈される位置と
実際に発音される位置とが異なる) 自然言語
の転置特性を捉える内的併合 (Internal
Merge: IM = 移動と、移動では移動される語
句と同じものが元位置にコピーされると考え
る「コピー理論」) という2種類が想定される
(Chomsky (2008: 140))。また構成された SO
はフェーズ (CP と v*P および DP) ごとに SM
インターフェースと C-I インターフェースに
送られ (音声と意味の) 解釈を受ける。SMT
によれば表現の演算処理は、フェーズごとの
単一サイクル／合成プロセスに限られなくて
はならない (Chomsky (2008: 142))。フェーズ
は、概略、統語構造上の大きな切れ目のこと
で、人間言語はフェーズごとの部分的な演算
(処理) に優れている、ということ捉えた
ものである。なお、既に処理の終わったフェー
ズに立ち戻ることはできない (「フェーズ不
可侵条件 (PIC)」) し、演算処理が終わった
フェーズは意味や音声を変えることができな
い (「改ざん禁止条件」) と仮定する (Chomsky
(2008: 143))。v*P や CP はフェーズであり、
目的語や主語の構造格や一致を決める場所
である。全ての操作はフェーズの主要部によ
って駆動され、フェーズの主要部 (C や v*) は

一致素性とEF (= edge feature) という2種類の素性をもつ。一致においてはフェーズの主要部 (Cやv*)が探索子(probe)として(それらのもつ「一致素性(φ素性)」を満たしてくれる)目標子(goal)を、探索領域であるフェーズ内で(探索子が目標子をc統御する、すなわち近くにあるものから)効率的に探すことになる。EFは内的併合を駆動する(要素をフェーズの末端に牽引する)素性である。Cは探索子としてDPを牽引するφ素性だけでなく、(wh疑問文などで)wh句をCの端に牽引するEFを持つわけである(Chomsky (2008: 148))。DPは(SPEC-Cではなく)それが一致するTの端(SPEC-T)までしか牽引されない。この場合、TがCから一致素性を継承するからである(Chomsky (2008: 148))。つまりCの代わりにTが探索子として、格素性の値が決まっている主語を目標子として探り、値を決定し、主語を随意的に(SPEC-Tに)繰り上げるのである。またv*もその一致素性を(補部である)Vに転送し、構造格を持つ目的語をSpec-V (Vの主語)に繰り上げて、この(構造格を持つ)目的語をv*が探索することが可能になる(Chomsky (*ibid.*))。こうして、例えばwho [C [v*_[V] saw John]]におけるv*-フェーズで、v*-Johnの一致によってv*が持つすべての解釈不可能素性が、目的語Johnが持つ素性によって満たされるのである(Chomsky (2008: 149))。Cやv*がもつ解釈不可能素性(人称、数、ジェンダー)は、構造をくみだてるときにレキシコンから取り出されたときには)値が未指定であるので、意味解釈を持たない(インターフェースで読めない)。したがって派生が収斂するためには、意味側のインターフェースに行く前に消去されなくてはならない。探索子が目標子を探り当てて素

性の値を決定すれば、「解釈可能な」素性と同じであるから転送されなくてはならない(Chomsky (2008: 154-155))。

Chomsky (2008) のMPの枠組みで、believe 類動詞の不定詞付き対格構文(34a) を分析した場合、問題となる構造は(34b) の様になる。正式には集合で表記すべきだが、便宜上、標示付き括弧で表示してある。語根beは(小さい)vに選択される動詞的要素で、v*は完全な項構造、他動詞や経験者構文(seem PP to XP)と結びつくフェーズの機能的な主要部である。

(34) a. He believed Melvin to be a pimp.

(Postal (1993: 349))

b. [CP ____ C [TP he T [vP* v*-believe [TP ____ [T to] [vP [v [DP Melvin] [v-be [DP a pimp]]]]]]]

不定詞付き対格の場合、1つのCP/TPの中に、別のTPが嵌め込まれている。文法規則(= Merge)は、フェーズごとに、下から順番に適用され、構成素が合成されていくことになる(cf. Chomsky (2001, 2008))。NSの派生は以下の様になる。まず何らかの手段で(不定詞なので上にEFをもつCはないはずだが「不可解なEPP条件(Chomsky (2008:153))」によって)DP(= Melvin)が、埋め込まれたvPの主語位置から、補文のTPの主語(SPEC-T)の位置に繰り上げられる。次にV(≡ believe)は上のv*から一致素性を継承し探索子となって(構造格を持つbelieveの目的語の)DPを探り当てSPEC-Vに繰り上げ、次に(v*が語根believeが動詞であることを決定するので)Vはv*へ繰り上がり、一致が適用され探索子v*の構造格(対格)が決定(されて消去)される。なお主節の主語heは、上のvP*の主語(SPEC-v*P)から出発し、上のTのEFで主節のTPの主語位置(SPEC-T)に繰り上げられ、

Tの ϕ 素性がtheyの主格を探索し、後者によって値が決まりTの ϕ 素性は消去される。

allege類動詞の不定詞付き対格(35a)と、その構造を見てみよう。

- (35) a. *He alleged Melvin to be a pimp.
 (Postal (1993: 349))
 b. [_{CP} ____ C [_{TP} he T [_{VP}* v*-allege [_{TP} ____ [_T to] [_{VP} [_V [_{DP} Melvin]] [_V v-be [_{DP} a pimp]]]]]]]]]

不定詞付き対格(allege類動詞)の場合も、believe類のそれとほぼ同じ派生が期待される。まず「不可解なEPP条件」でDP(= Melvin)を、埋め込まれたvPの主語位置から、補文のSPEC-Tに繰り上げる。次にV(≡ allege)が上のv*から一致素性を継承し、探索子となって(構造格を持つallegeの目的語の)DPを目標子としてSPEC-Vに繰り上げ、次に(v*が語根allegeが動詞であることを決定するので)Vはv*へ繰り上がり、一致が適用され探索子Vの構造格(対格)が決定(されて消去)される。なお主節の主語heは、上のvP*の主語(spec.)から出発し、(CからEFを継承した)上のTのEFで主節のTPの主語位置(SPEC-T)に繰り上げられ、Tの ϕ 素性がtheyの主格を探索し、値を決めることができる。しかし実際はallege類動詞の場合には「何らかの理由」でMelvinを埋め込まれたvPの主語位置から、補文のTPの主語(SPEC-T)の位置に繰り上げることができないので、EFが虚辞の外部併合で満たされない限り構造が排除される。あるいはMelvin/whoは補文のSPEC-T(からSPEC-V)に繰り上がっても、そこに留まることができず、主節のTあるいはCのEFによって牽引され(受動化ないし話題化され)なくてはならない。本論考では、(allegeの)不定詞付き対格におけるTのEFは、不定詞がCPでは

なく、従ってフェーズの主要部となるCがないので、TがEFをCから継承することはできず、またEFをもっていたとしても非常に「弱い」と考える。Chomsky (2008:157)で示唆される(ややその場しのぎの指定的な)ある種の「素性散布(feature spread)」がCから、そのフェーズ内のすべてのTに拡散するとしても、継承によるEFとは異なることも根拠のひとつである。一方、弱い代名詞himの場合は(「軽い」ので)補文TPの主語位置に引き上げることができる(言換えるとBošković (1997)流に接辞編入される)。しかしLasnik (2008)の判断では完全に適格文とはならない。
 (36) (??) Bill alleged [_{TP} him [_T [_T to] [_{VP} be a pimp]]] (cf. Postal (1993), Lasnik (2008))

以上Chomsky (2008)の枠組みに基づくbelieve/allegeの繰り上げ/ECM構文の分析を示した。しかし、believe類動詞の場合もallege類動詞の場合も(既に示唆した)以下のような問題が生じる、と思われる。第一の問題は、埋め込まれたto不定詞のTPのSPEC-Tに、DP(= Melvin, him)を上げるには、昔の「EPP素性」で上げる他ないように見える、という点である。その理由は、下記の(37)の例が示すように、(believe/allege不定詞付き対格の)埋め込まれたto不定詞節はCPではないのでEFをもった主要部Cもないことになり、(Chomsky (2008: 143)の様にTはCに選択されたときのみEFや ϕ 素性を継承すると仮定するなら)EFをCから継承することもできないからである(Chomsky (2001: 124) 'Minimalist Inquiries'ではto不定詞のT([_T to])は人称素性(person feature)ぐらいはもっている、とされているが)。

- (37) a. *We believe [_{CP} [_C for] [_{TP} John to be a serial killer]].

- b. We believe [_{TP} John to be a serial killer].

しかもChomsky (2008: 143) は、「繰り上げ（あるいはECM）の不定詞は ϕ 素性も基本時制も欠いている」と述べており、believeやallegeの不定詞付き対格の埋め込まれたTPのSPEC-Tに、TがDPを繰り上げる手段がないことになる。

Chomsky (2008: 156-157) も「EPPのミステリアスな特性」は厄介な問題である、と述べている。「繰り上げ／ECM不定詞」についてChomsky (*ibid.*) は「EPPはその一部を内的併合(IM)の一般的なステップごとの特性に還元することができるが、それはほんの一部分にすぎない」と指摘する。その理由としてChomsky (*ibid.*) は、繰り上げ操作・IMにおいて「EPPの残滓ともいえる、SPEC-Tが特別な役割をすることになるからである」と述べている。またEPP素性は仮定していない。

Chomsky (2008: 157) は、EPPの扱いに対しては以下の様な方向性を示すに留めている。すなわち「フェーズの主要部でないTはCからEFや一致素性を継承する必要があるが、それはある種の素性拡散によって行われることになり、この拡散によりフェーズ内のすべてのTにEFが広がるのである」と、Chomsky (2008: 157) は提案している。(33)や(34)の構造において、主節のTはCPのフェーズ内にあるので問題はない。しかし(もう1つ別の)下のフェーズの段階、すなわち v^*P 内での言語処理が終わらないうちに、その上のフェーズであるCPのCがもつEFをいわば先取りして、 v^*P 内のTに「散布」するわけにはいかないのではないか、と思われる。なお文法規則が、すべてのフェーズで同時に(simultaneously)に適用されるとしても問題

は解決しないと思われる。

本論考では、Tに2種類あって、CFからEFを継承する従来のTに加えて、believe/allegeの不定詞付き対格のto不定詞のTはフェーズの主要部となることができ、EFをもっているのではないか、という可能性を示唆しておく (cf. Ike-uchi (2003: 79-80))。但しChomsky (2008: 157) の「素性散布」と同様に特別な指定になることは否めない。

第二の問題は、補文のSPEC-TへのDPの繰り上げはA移動でなくてはならないということと関係する。Chomsky (2008: 149ff.) はフェーズの主要部のEFによって繰り上げられるA'位置 (Spec-C, Spec- v^*) と、それ以外の派生によるA位置の区別をことのほか重視している。ところが (ECM不定詞補文の主語) DPを繰り上げる場合 (Tが何らかの手段でCからEFを散布されたか、あるいは他の手段でEFをもつようになったものと仮定しても)、EFだけの移動は \bar{A} 移動ということになり具合が悪いことになる。そこでTのEFではなく、(ϕ 素性による移動はA移動になるので) ϕ 素性が不定詞付き対格の対格DPを引き上げる、という特別な指定が必要になるが、これも問題であると思われる。

ともかく、不定詞付き対格においては繰り上げDPをSPEC-Tまで引き上げておけば、次のphaseであるCPにおいて、Topicやwh句を探す、(CPのフェーズ) 主要部Cが持つEFによるMelvinのCPの指定部への \bar{A} 移動で、例えば、以下の様な話題化は可能になる。*t*はMelvinのコピーの略記である。

- (38) [_{CP} Melvin [C [he alleged *t* to be a pimp]]]

(cf. Postal (1993: 349))

最後に補文がthere構文の場合を見てみよう。

- (39) a. He alleged [_{TP} there [_T to [be stolen

documents in the drawer]]]

(cf. Postal (1993: 361))

- b. *He alleged [_{TP} stolen documents [_{TP} [_{TP} to] [be in the drawer]]]

(cf. Bošković (1997: 78))

(39a) の場合、虚辞thereが補文のSPEC-Tに外的併合され、DPは繰り上がらないので問題は生じない。一方、(39b)の様に嵌め込まれた節のDPがTPの主語に繰り上がることは阻止されることは既に見た通りである。

3.3. Chomsky (2008) の補完：定性階層

以下、本論考はChomsky (2008) の枠組みでのNSの分析を補完するものとして、allege類動詞の不定詞付き対格構文において不定詞の意味上の主語だったものを、主節の目的語に繰上げる統語的な手段が、DPの「定性 (definiteness)」によっても左右されることになる、という提案を行う。つまりallege類動詞の不定詞付き対格構文(40a, c)は、believe類 (例外的格付与) 動詞のそれ(40b)とは異なり、there構文(41)と同様に、動詞句内の主語に「定名詞句 (e.g. Melvin, the riot, Harry)」を取ることができないので、「定性効果 (definiteness effect)」を示すことになる(cf. Safir (1982), C. Lyons (1999: 16), Chafe (1976), Comrie (1981: 123ff, 191))。

- (40) a. *He alleged Melvin to be a pimp.

(Postal (1974:304), Postal (1990: 349))

- b. He believed Melvin to be a pimp.

(Postal (1990: 349))

- c. cf. I alleged *John/?him to be a fool.

(Lasnik (2008: 37, n.9))

- (41) a. There ensued a/*the riot on Mass. Ave.(Reuland and Meulen (1989: 2))

- b. *There's Harry with a red hat on, isn't

there? (Lakoff (1987: 466))

「定性」とは、Chafe (1976: 39) によれば「ある指示物について、聞き手も既にそれについて知って、同じようにカテゴリー化できる全ての指示物の中から、話し手の意図する指示物を同定できると、話し手が見なすことができるもの」のことである(Comrie (1981: 120ff.)も参照)。「定」名詞句には、(Melvinの様な)固有名詞だけでなく、定冠詞の付いた名詞句 (e.g. the student) や人称代名詞 (e.g. me, you, him) が含まれる(C. Lyons (1999: 26), Postal (1970: 203, 214ff.))。実際の談話では主語から目的語への情報の流れは、定性の高い方から低い方へ流れる傾向があるというComrie (1981: 121) の観察に従えば、繰上げ構文でallege類動詞が後に (つまり不定詞の意味上の主語に) 特別な意味 (をもつ定性の高い名詞や新情報) を凝縮して詰め込むとよくないようである。言換えると、allege類動詞は、その語彙特性として、文頭など普通でない位置におかれる対照の焦点 (定名詞句) と、VP内の別の対照の焦点 (新情報) との組み合わせについての情報を提供する機能を持つので、VP内 (=不定詞付き対格内) に2つの焦点が隣接して、いわば凝縮する形で並置すると情報処理がしにくくなるのではないと思われる(Cf. Chafe (1976: 49))。これは、(42a)のような強勢(´)の配置を持つ話題化構文を(42b)の様に変わると不自然になる現象と平行すると思われる。

- (42) a. The pláy, John saw yésterday. (=As for the pláy, John saw it yésterday.)
(Chafe (1976: 49))

- b. *John saw the pláy yésterday.

また英語の場合、allege類動詞の不定詞補文の主語に「代名詞」が来る場合には、「完全

な」名詞句が来る場合よりも容認度が上がるという(26)の事実は「定性階層 (definiteness hierarchy)」上、代名詞と非代名詞の間に切れ目があることの反映であることも本論考では主張する。C. Lyons(1999:30)は「完全な名詞句」に比べて代名詞は(ジェンダーの様な部分的に記述的な文法素性を除いて)記述内容を欠いている」と指摘している。同じ定名詞句であっても、差があるということである。従って本論考では①英語は(言語類型論で用いられる)「定性階層」において、非代名詞が代名詞よりも高く(右側にあり)定性効果が大きくなり、②allegeは特殊な部類の動詞であるので(不定詞補文の主語から主節動詞の目的語への)「非代名詞」の繰り上げの様な統語的操作は(接辞編入に頼ることもできず)「定性効果」も働いて容認度が下る、ということをも主張する(cf. Comrie (1981), Kiparsky (2008), Authier (1992))。

(42) 人称代名詞 > 非代名詞 (定名詞句)

(cf. Gen'ey (2003))

Chomsky (2008:141) は、CIインターフェースは一般的な項構造を一部門とし、談話関係とスコープの特性を別の部門とする「二重の意味論 (dual semantics)」を含んでいると述べている。定性効果を談話関係の一部と仮定してみよう。派生Dの意味側(SEM)に、本論考の主張を組み入れる可能性が出てくる。allege類もECM動詞の周辺部に属すると仮定すれば、不定詞付き対格構文において、定性階層上低い位置にある代名詞はEPP条件あるいはTのEFでIMにより補文のTPの主語に引き上げることができ、EFを満たすことができるが、定性階層上高い位置にある非代名詞は(動詞allegeの特殊性と連動して)IMにより引き上げることができず、EFを満たすこ

とができない、という議論が可能になる。またCI側の定性階層に照らすと、代名詞も定名詞であるので、特殊な部類の動詞であるallegeの不定詞付き対格の場合、英語では必ずしも一般的でない(強い代名詞と接辞の中間にある弱い代名詞の)接辞に準じた編入を無理に行い、定性効果もあって、(25)や(39c)の様に容認度が下がるのである。こうすればLasnik (2008)の分析では説明できなかった問題に説明を与えることができるように思われる。Comrie(1981: 188)は、ロシア語では(3人称中性代名詞をのぞき)全ての代名詞に特別な属格に似た対格が用いられ、非代名詞と区別されるという言語事実を挙げている。従って(生成文法で仮定する)構造格と定性の間に相関関係があると仮定することは、言語類型論的にも裏付けがあり、それほど不自然ではない、と本論考では主張する。

4. 結論と残された問題

本論考では(1a)の様なallege類動詞の不定詞付き対格構文をChomsky(2008)の枠組みで分析し、この統語現象にはallege類動詞の個別の語い項目の特性に帰される「定性効果」が関わっていることを論証した。残された問題は①Postal (1974)のallege類動詞の個々の動詞の不定詞付き対格について丹念に言語事実を検証し、②一般言語理論との関係で、believe類動詞とallege類動詞の連続性(believe類動詞よりallege類動詞の不定詞付き対格構文の方が、寄生空所やtough構文とは両立しにくい、とPostal (1990: 358)が指摘する事実も含め)を基本的なものと、そこから出てくる特殊なものとの関係と見て「動的に」説明し、③通言語的・類型論的一般化と関係する定性階層が(おそらくはC-Iイン

ターフェースと関係すると思われるか)どの様な基盤をもつか探究することである。

謝辞

本論考の執筆に際し梶田優、池内正幸両先生の東京言語研究所理論言語学講座における講義から多くの示唆を得た。また濱松純司先生からも貴重なコメントを頂いた。ここに記して感謝の意を表する次第である。不備は私の責任である。

参考文献

- Authier, J. (1992) 'Is French a Null Subject Language in the DP?' *Probus* 4.1: 1-16.
- Bošković, Ž. (1997) *The Syntax of Nonfinite Complementation*, The MIT Press, Cambridge.
- Cardinaletti, A. and M. Starke (1999) "The Typology of Structural Deficiency: A Case Study of the Three Classes of Pronouns," H. van Riemsdijk (ed.), *Functional Structures in DP and IP*, Oxford University Press, Oxford.
- Chafe, W. (1976) "Givenness, Contrastiveness, Definiteness, Subjects, Topics, and Point of View," C. Li, (ed.), *Subject and Topic*, Academic Press, New York, 25-35.
- Chomsky, N. (2000) 'Minimalist Inquiries: The Framework,' D. Michaels, and J. Uriagereka (eds.), *Step by Step*, MIT Press, Cambridge, 89-155.
- Chomsky, N. (2001) "Derivation by Phase," M. Kenstowicz, (ed.) *Ken Hale: A life of Language*, MIT Press, Cambridge.
- Chomsky, N. (2008) "On Phases," R. Freidin, C. Otero, and M.L. Zubizarreta (eds.), *Foundational Issues in Linguistic Theory*, The MIT Press, Cambridge, 133-166.
- Comrie, B. (1981) *Language Universals and Linguistic Typology: Syntax and Morphology*, Basil Blackwell, Oxford.
- Gen'ey, H. (2003) "The Syntactic Behavior of *Allege-Type Verbs*," S. Chiba, et al. (eds.), *Empirical and Theoretical Investigations into Language: A Festschrift for Masaru Kajita*, Kaitakusha, Tokyo, 160-173.
- Ike-uchi, M. (2003) *Predication and Modification - A Minimalist Approach*, Liber Press, Tokyo.
- Jespersen, O. (1940) *A Modern English Grammar on Historical Principles*, vol. V, George Allen & Unwin.
- Lakoff, G. (1987) *Women, Fire, and Dangerous Things: What Categories Reveal about the Mind*, The University of Chicago Press, Chicago.
- Lasnik, H. (2008) "On the Development of Case Theory: Triumphs and Challenges," R. Freidin, C. Otero, and M. L. Zubizarreta (eds.), *Foundational Issues in Linguistic Theory*, The MIT Press, Cambridge, 17-41.
- Lasnik, H. and Saito, M. (1991) "On the Subjects of Infinitives," *CLS 27: Part 1*, 324-343.
- Lyons, C. (1999) *Definiteness*, Cambridge University Press, Cambridge.
- Mair, C. (1990) *Infinitival Complement Clauses in English: A Study of Syntax in Discourse*, Cambridge University Press, Cambridge.
- 中島平三・池内正幸 (2005) 『明日に架ける生成文法』 開拓社
- Postal, P. (1969) "On So-Called 'Pronouns' in English," D. Reibel and S. Schane (eds.), *Modern Studies in English*, Prentice-Hall, INC., New Jersey, 201-224.
- Postal, P. (1974) *On Raising*, The MIT Press, Cambridge.
- Postal, P. (1993) "Some Defective Paradigms," *Linguistic Inquiry* 24, 347-364.
- Reuland, E. and A.G.B. ter Meulen (eds.) (1989) *The Representation of (In)definiteness*, The MIT Press, Cambridge.
- Ritter, E. and S.T. Rosen (2005) "Topic or Aspect: Functional Heads, Features and the Grammaticalization of Events," R. Kempchinsky and R. Slabakova (eds.), *Aspectual Inquiries*, 21-39.

- Safir, K. (1982) “Syntactic Chains and the Definiteness Effect,” Doctoral dissertation, MIT.
- Ura, H. (1993) “On Feature-Checking for WH-traces,” MITWPL 19, 243-280.